

詩南車

昭和六年六月二十日印刷
昭和六年六月二十五日發行

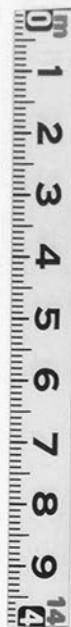
短歌特輯號

第六年

第五拾輯

磐城

詩南社



寄贈雜誌
編輯後記

信條

ふくろふ

高久

晩

霞

ふくろふの庭に迷ひ來て晝なればつづら目しつゝ捕はれてけり
珍らしく大なる梟カナリヤの空籠に居て羽も廣げ得ず
聲に知れ始めて見るとふ人多く籠の梟に集ひて離れず
二日して親子の大工等捕はれの梟のために金網造りし
ふくろふの爪くちはこの鋭ざけれつづら目の面に親しみのあり
山奥に聞くふくろふは寂しからめ飼はれて鳴くは夜も親しきを
さ夜くだち鈍間聲してふくろふのほろすけほうと鳴くはおかしき
あけ近く籠の梟のしきり鳴くに目ざまされしか妻も笑へり
聞きなれし梟の聲も鳴き出づれば耳そば立てて笑ひ合ふかな
夜くだちてのみ大かたを鳴く梟ひる寝ねにつゝもの足らぬかな
ふくろふの目つね丸しと思ふからに晝寝する面おどけて見ゆる
結ばれしこゝろ解かまく時々を道化顔せるふくろふに見入る
晝なれば聞音悪しきを梟もみづから知るか二たびは鳴かず
間なく鳴くはいやしと云ふか梟の夜もまれに鳴きて調重々し
ふくろふの鳴く度耳をそば立つれど三聲四聲を鳴き越さずけり
梟鳴くを知ずて過ぐる日の多しうまいする夜の續くこの頃
宵なればふくろふはまだ眠からし寝ばけ聲して一たび鳴きぬ

わがほごり狂ふ鼠を晝なればただつづら目にふくろふは見居し
夜となれば鋭とき目してふくろふは凡ての鼠喰み殺しけり
生けるまゝの餌を喰むしぐさむごたらしきげに梟を猛鳥とよぶ

山野邊青甫

面やつれ床ぬちにある友の顔に苦しみは見ゆ痛み來るらし
湛々と水をたゝへし北上の流れに添ふて汽車ひた走る
汽車は今北上平野を過ぐるらし折々見ゆる遠きともしび
はや四月我に就職の口なくて母は寢床病みたまふなり
母一人居まさぬ夕餉のかくまでも淋しき思となりけるかも
藥瓶提げて歸るに青麥を吹き來る風の寒くはあらず
職なくも一人身なれば食ふことの切なき思うすぎがうれし

春雜詠

柏木哲

硝子戸に吹きつけられし花びらは雨に濡れつゝ空白みゆく
しつとりと露にぬれたる葉櫻の新川端を行く人あり
勤めをえて新川端を歸る身の葉ざくら見るをたぬしと思ひぬ
曲馬園引きあげし後の繩きれに花散りかゝる寂しき夕暮
南町の女は悲し霧深き春の夜ふけを軒にたゝすむ

青葉集

柴田亮

春はさぬ野邊吹く風にはつはつの
千草の色のうすみぎりより
春くれば想ひ出さるゝ伊江島の
土人のうたふ哀れなるうた
呼べど呼べど夕陽は赤く落つる
なり去りゆくひとのかげのさみ
しき
いつしかに寒さ遠ざかり董咲き
麗ら日つづく春となりけり

熊谷比呂子

家びこの話とだえて音もなく降
る春雨に夜はしづかなり
忘れ得ぬ寂しき今日ぞ八年前妹
ゆきしきさらざ六日
咲きそめし櫻つれなくも雪に散
りし如くに逝きぬ幼なき妹

根本橘月

ささらぎの澄みたる空に子等の
揚ぐる風に畫ける日の丸赤し
うたかたの消えしが如く逝きし
友を送り行く野邊に淡雪のふる
春雪はいつしか解けて枯芝の堤
に三つ四つ露の葉
雲雀なく青空見れば夢の如くほ
のかに畫の月浮びたり
上京の友は語らず吾れ云はず風
寒き朝を汽車走り出づ

木野もと子

うつろなる心をだいて今日も赤
春日のえんにつめみがきする
わたぐもがよはい春日をかげら
せばあとはつめたくにぶいひき
くれてゆく山の端近く馬子がつ
かれきつた馬引いてゆく
しやびきつた聲で馬子吹うたつ
てく日ぐれの町をあへぎ／＼つ

池上富司

幼な友達中で死んだのは正ちや
んひとりだひとだけ
正ちやの父さんが手ばなした工
場は正ちやんと遊んだ頃のまんま
我家が人手に入つておばあさん
と裏家すまいした正ちやんの淋
しい氣持
若くて肺を病んでそのまんま死
んだ正ちやんの氣持になつて見る
淳ちやんががんばつてゐるこの寫
眞小學校時代の氣分がまのあたりに
水泳を教へて呉れた淳ちやんと
今また一緒に遊ぶやうなこの賀狀
に小さい頃の足跡がまだ匂つてゐる
大きくなつた定ちやんを想つて
見ろがやつり八年前の姿のみ
想はれて

唐木登志

春が來たのに不況の嵐に鐵もつ
團扇の様な手よ、プロレタリア
の娘よ
作業場でインターナショナルの
口笛を今日も聴いた、油で光つ
てゐる黒い顔の同志だ
操短、質下、餓首、工場から追
る、歸農者よ、此處も行手は嵐
のすさぶ農村だ。

大賀睦堂

はからずも病みて肌をきずつけ
し吾をゆるしませ遠き父は、
塵箱をかきわけにつゝ酔えし人
の踏む足もとも心もとなき
わふり足らぬ眼にも朝はうれし
けれ青葉の風に深く息すも
梨子の花みな散りはてゝ横さま
の枝の青葉の光り目にしむ

窪田志朗

病んでゐる身を押しして勤めに出
てゆく私の生活の悲しさ

傷ついたわたしの心を雪が埋め
てくれる、冷たい冷感傷なんです
この人の話がとても幸福さうで
聞いてゐても頬がきこくるです

渡邊喜美

軒ひさしにからみ合つて消える
煙にうすらうすら風が吹いてゐる
顔をふせて手の冷たさが厭にな
つた——くすばる炭火のほひ
熱にうづく指先を頬にあてゝゆ
らめいてのぼる火の勢をみる
ほこりのついたサイダーの空壺
！いつまでも氣かすかしてみる
地の底の春の匂ひがひたひたと
日にこけるらしい陽炎がもえて
涯しなくはしる白い道！夜明け
の霧にしみてゆく追憶だ

江藤宏子

庭先の龍膽の葉をふるはせてし
ぐるゝ雨の降りにけるかな

との面には時雨の音のかすかな
り心静めて文よみにけり
ほのかなる愁ひ湧き來ぬ水溜の
すめる水の面見つめてあれば
ものなべて濡るゝがまゝの寂し
さよ夕べさ庭に時雨降るかも

湯淺榮美花

鐘の音の淋しくひびく夕べかな
わが友とはに去りて歸らず
暮れなづむ夕空遠く二つ三つお
くれ鴉の飛び行くが見ゆ
くち笛を吹きつゝ歸るわが頬に
春の夜風の冷たく觸るゝ

修文子

町からの春の夜曲を聴きながら
まづしい食卓に向ふ百姓だ！
とてもすき通つた光線が、朝の
寢覺をほがらかにさする

誰もゐない

鈴木 秀子

ぐんぐん親しんでゆく心に、異性を意識せしめる寂しさ
 歪んでゆく友情を持てあまして夜の炬燵にうつぶしてゐる
 ふかふかと布団に顔をうづめてゐる懐かしくてならぬ母を憶ひつゝ
 澄んだ青空の下に誰もゐないといふ氣安さが私を泣かせてゐる
 きつぱりものを断はつた私、まるで他人の様になつてゐる
 朗らかにしゃべつてゐる私よ、お前の憂鬱はどこへやるのだ
 親しんでゆきつゝもはみ合つてお互ひの心を誤魔化してゐる
 親しもうにはみ合つてやうやく保たれてゐる友情
 しつとり濡れた若芽の中から春を拾ひ取てゐる、朝！

身のほとり

此の拙き歌の數首を、
 未知なる唐木登志君に贈る。

老 父

えとう・さぶらう

老らくの父珍らしく酒に酔ひとぎれ／＼に語るさふかな
 名残なる謠き、居れば泌々と秋の氣がして佗しさの湧く
 あらにはにも目にこそ見えて老父の酒くむ顔のしるきおころへ
 運命のまぬかれ難きその力大なる手をしみに思ふ

愁 情

あまりにも友の僞心は多くしてあらはなるこそ哀しかりけれ

身を歎く苦しみを解くすべもなしわがゆく道の心もとなさ
 このびよる風のすがくひたる湯にいさ／＼かなごむ心なるかも
 かにかくに愁ひ心のつりきて牧水が歌を口すさみけり

讃

路はるか北の國なる君が歌闘争の歌はわが胸を突く
 闘争のはげしき報のしきりなりはるけく君を思ふ夜かな
 醜きにすぐ世の様に逆きたる君が心はよむべかりけり

荷 牛

大 平 松 夫

月出で、はだらに見ゆる雪山をかくれつ出でつ荷牛下り来る
 一日に三度歩かねば喰へぬと云ふ牛方の話ふと思ひ出す
 純なるべき女なれどもたづさわる生業ゆへにすさむ心か
 小鳥の羽毛血にそまりありこの簑は晝さへ暗くみみづくの啼く
 水がれの河原の石の白々と光り治めたきを舌が越えにけり

亡き友にさゝぐ

水 町 冷 子

泣けしごと空は曇れり徒の野にいまし柩は六出でにけり
 たゞたかく晴れたる空のさびしさを秋といふ日に逝きし人あり

詩南社清規

- 一、詩南社は況く文藝を愛好する者を
 として組織す
- 一、詩南社は隔月に『詩南車』を發行
 し臨時文藝講演會・展覽會・音樂
 會等を開催す
- 一、詩南社は會員を左に分ち廣く會員
 を募集す
- A 特別同人
- B 同 人
- C 準 同 人
- D 社 友
- 一、會員の維持費は毎月(隔月)同人は
 一圓、準同人は五十錢、社友は十
 五錢とし全べて前納するものとす
- 一、會員には『詩南車』發行毎に同人
 は五部、準同人は三部、社友は一
 部宛頒布を受くるものとす
- 一、會員の原稿は自由にして文藝に關
 する一切のものを發表する事を得
 一、詩南社は會員五名以上ある所に
 は支社を設置するものとす
- (附記、同人及び準同人支部規定は
 別に印刷してあり)

受贈詩集

- 詩集カ チ 内野健兒著
 詩集 逆火する群 穴戸貫一郎著
 詩集 商人の詩 淺海與三男著
 詩集 或る品評會 三野混沌著
 詩集 農務調査 猪狩満直著
 詩集 曇り日 石川武夫著
 詩集 白鷗の夢 高木夢星著
 民謡集 地球の命 網島嘉之助著
 民謡集 葉多血心 網島富美恵著
 民謡集 片割れ月 福島貞天著
 歌集 福島縣代表歌人 天野多津雄著
 選集
 川柳 花かげ 久田狂水著

受贈雜誌

- 宣言(東京) 黒道(同) 生活感情(同)
 黒色青年(同) 花婿(同) 死の旗(同)
 詩論文學(同) 詩サロン(同) 新日本
 詩人(同) 創造文學(同) 若き旗(同)
 兒童藝術(同) 砂山の唄(新潟)

さむくセルの單衣の肌ざわり秋のちまたに人をおもへつゝ
交はりはまだあさかりし友なれど逝きしときけばさびしきかぎり

野の道 大竹秋平

夕日照る山の小路に雲解けず見る眼まばゆく輝きにけり
人影の見えぬ淋しき田舎路も母在す思へば心嬉しき
裸木の木群に見ゆる三日月のことさら身にしむ冬の道かな

春

久しくも人の住はぬ隣家に梅の花咲けり今朝のしづけさ
初春の月にかゝれる白雲のおほらかにして流れ行く見ゆ
真夜中に一人目覺めて故里を思ふ心に春雨の降る

窓・青空

古澤 たみる

眞黒にすゝけた工場の板塀に、落書ばかりが白くうかんで(夕ぐれ)
窓——窓、青空が四角にくざられて、何もない教室の午後の風景
夕暮れの村はづれをゆく荷馬車のおと、遠くてさびしいな
椿の花をみつめてゐたら、あら！なんて青い小鳥なんだらう
きれいにつきをした足袋だ、母の氣氣に泣いてゐるわたくし

與へられた弧線

白木英尾

むなしき感情のベルトが旋回して、目をあいた屍が轉落する！お、私だ！
がくこうを退めて村へ歸り私はたゞもう死ぬばかりの人間
私に與へられた運命の弧線——家族制度をのろはしめよ！
いつかしら、夢さみて夢を食べて、獲みたい人間になつてしまつた
自己 齟齬の生活のさみしさ、私はこんこんとねむりにふける
同一圓周上をめぐる肯定と否定と——インテリゲンチヤの哀しき論理

春！きちがひ花

そうそうと水の落ちしぶく音！あゝ早春の野のなつかしさ！
壓へても壓へても壓へきれない春の示唆！若者は一散に駄馬を馳らせる
まぶしい春の外光を浴びながら山の上でひとり眼鏡をふいてゐる
いきなり山の傾斜地にころがり、きちがひ花となつて燃えるやうな氣持
これはなんといふむせつばい明るさだ！青い青い一面の麥畠！

がらんとした農家執達吏に赤兒の泣きごゑがぶつつかつてくる(農村不況)
意志をうしなつた農村風景！日蝕の地球儀上を驅ける人々！
農村骨骸だけ残つて崩壊してゆくものゝ美しいプロフィールだ

- 舟江清景(同) 下野樂談(宇都宮)
詩作品(収録) 装 置(小樽)
双樹林(福島) あげぼの(同)
中堅詩人(同) 地方藝術(同)
海岸線(同) 文學新陣(富山)
詩と民謡(同) 女人文藝(長野)
詩使徒(大阪) 詩と映畫(仙台)
憂鬱な街(静岡) 遠州雜(同)
創造の旗(茨城) 水脈(京城)
果樹園(千葉) 砂丘(同)
東北詩人(宮城) 童心藝術(長崎)
PIED-DE-NEZ(岸和田) 天使と失業
者(岡山) 永遠(横濱) 濱松
詩人(濱松) 關西文藝(大阪) 詩
關西詩人(同) SOS(同)
華園(和歌山) すずらん(岐阜)
岐阜民謡(同) 青い獵人(東京)
林檎の花(同) パリンド(山口)
さふり(熊本) 北海詩歌(札幌)
あんだんて派(群馬) 花祭(京都)
風と雜草(神戸)

霰兒

—【10】—

佐藤正美

麥畑の穂むらかそかに輝やきて吹くとしもなき風渡るなり
わたち

春雨の晴れてすがしき村の道自轉車の轍美しく見ゆ

一本の杉に渦まく夕雲のあかく照れり愁うるなかれ（明日をきつかふ日）

日のいされ部屋に籠りてひつそりとひそむ心に若葉きらめく

我が裏の窪田の蛙この夕鳴き初むまゝに夜となりぬる

かなしきは通信鳩ぞ

歸り行く道に迷ひて捕はれし通信鳩は悲しき鳥ぞ（某警察署に届けらる）

紅の通信筒を脚につけ疲れ居るらしいなじを垂れつ

眞晝日の光まぶしみ籠に居て飛ばむとすらし羽ばたきながら

我が行けばくゝくゝくと啼きつゝもをじけし如く眼ををぞらする

小さなその嘴を壺に入れ水をふくみて我を見あげぬ

餌壺に水汲み入れし小使をおまゝに見あげぬそのつばら眼よ

編輯後記

- 春のすか／＼さが訪れて空気が爽やかに躍つて居ります、本誌も今回でいよ／＼二十五輯になりました、同人雑誌『詩南車』が経済的な基礎を動搖せしめながらも尚ほ潑瀾な前進を續けて居る事を御挨拶各位に感謝致します。
- 本誌は特に短歌號と致しました、そしてよりよき作品を得る爲極力厳選主義を取つた結果、すい／＼作品を削除した事を投稿者各位にお詫び致します。
- 尙これが爲紙数の薄くなつた事を遺憾に思ひます。
- 本誌より白木氏の自由律の口語歌を掲載される事になりました、口語歌發達の過程にある現在白木氏の歌は本誌に取つて一つの収獲と信じます。
- 高久氏の「木兎」は二十數首に亘る力作で絶えず、本誌の爲活動して下さる事を有難く思っています。
- 次號より本誌をしてより潑瀾な戦車の如くあらしめたいと思ひます、諸氏のよき御叱正あらん事を望みます。
- (佐藤正美)

都合に依り編輯同人を脱け編輯發行一切の責任を佐藤君に委託しました今迄で色々と勉強された諸氏に對して感謝致します。

原稿締切七月末日迄 次號八月發行

詩 短歌 俳句 創作 評論 以上必らず原稿用紙使用の事
短歌に限り平町田高久晚霞氏宛の事

昭和六年六月二十日印刷 納本
昭和六年六月廿五日發行
定價拾五錢(送二錢)五〇〇部發行

編輯兼 佐藤正美
發行人 福島縣平町南町五十九番地 鈴木屋書店(若松)
印刷者 鈴木屋書店(若松)
印刷所 福島縣平町南町五十九番地 鈴木屋書店(若松)
發行所 福島縣平町南町五十九番地 鈴木屋書店(若松)

片寄書店

古書籍と額縁

● 初夏の涼夜
星！降る降る……
棕櫚林の中の
静けき家！
求め來し書を
君と
読み明かさむ

平・五丁目

● TEL ● (410.516) ● TAIRA ●

石城郡銀行組合



昭和活版所

平町南町
電話六六番呼

正札堂

例の「ソレ」

ヨウ？モターン？
い、服を求めたね
斷然三一年型だよ
いやコレカネ



平町四丁目停車場通電六三

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K. K A M A Y A

目 科 療 診

内 科、小 兒 科、婦 人 科
外 科、耳 鼻 咽 喉 科
皮 膚 病、花 柳 病 科
レ ン ト ゲ ン 科

院 長 醫 學 士 高 久 忠
副 院 長 新 潟 醫 學 士 赤 羽 清
藥 局 長 藥 劑 士 佐 竹 菊 雄
宅 診 午 前 — 往 診 午 後

平 町 田 町 六 十 四 番 地

高 久 病 院

電 話 五 一 三 番

【 額 價 拾 五 錢 】